

第70回浜松市芸術祭 はままつ演劇フェスティバル「劇突」 自主公演劇評

田ノ口誠悟

この度、はままつ演劇フェスティバル自主公演の審査員に選んで頂いた。2024年4月に仕事の関係で浜松に越して以来、浜松の演劇がどのようなものか興味を持っていたので、審査員という形で間接的にでもはままつ演劇フェスティバルに関わることが出来ることは本当に嬉しい。自主公演審査員に選んで下さった主催者の皆さまに心より感謝申し上げます。

私は浜松という街で、どのような演劇がどのように生み出されているかというところに興味を持ってそれぞれの作品を観たので、以下の劇評も自然とそのような観点からの、広い意味での一般的な「劇評」とは異なるものとなった。その点ご容赦頂きたいと思う。ともあれ、4作品を観る中で、浜松の演劇が思った以上に多様な個性を持ち、深い歴史に裏付けされていることに感銘を受けた。これからも全国的にもなかなか見られない浜松のユニークな演劇文化が続いて行ってほしいと心から思う。

① MUNA-POCKET COFFEEHOUSE 第26回公演『紙』（作・演出：永井宏明、クリエート浜松）

最初に観た浜松の演劇は、毎回の公演が大盛況と評判の人気劇団 MUNA-POCKET COFFEEHOUSE の最新作だった。ベストセラーになった人類学の本『サピエンス全史』に基づいているということで難しい内容なのかと最初は身構えたが、物語はある一室で二人の人物が紙を折りながら、社会や世界のさまざまな事象について話し合うという寓話的なものだった。

紙を折りながら、二人の間で話し合われることは、抽象的ではあるにせよ、我々の日常についての話題で、どこか心に突き刺さってくる。「私は誰なのか？」という冒頭のモノローグから始まり、中東や阿蘇など地理の話題、商品とサービスの関係、会社勤めの日常、お金の話、賄賂の話、劇作家という職業について、選挙について、電気を売ることについて。さまざまなことが脈絡なく話し合われる。最後の方に紙で何かを作ること、何かを想像・創造するということが話し合われ、全体として想像力や現代における芸術の力、みたいなものをテーマにしているのかと思ったが、対話も演技も、最後までふんわりとしたものであった。

芝居が始まる前の紙を使った遊戯で、演者の一人が浜松の有名企業の名を口にし、「皆さんと深い関係がありますよ」と呼びかけていた。だから私は、個人的にこの物語を浜松で生きる一般的生活者の日常の思考を描いたものだと思っ取った。何も明らかにならないまま、何か確かなものを創造することもなく過ぎていく日常、現代人の大半が生きているそ

んな「自分が誰なのかわからない日常」が浜松にもあるのだ。演技も含めた全体の気だるい空気感になぜか好感を持った。

② 劇団からっかぜ第 289 回公演『切り子たちの秋』（作：ふたくちつよし、演出：布施佐一郎、浜松市勤労会館 U ホール）

設立 70 周年を迎える、現役のものでは日本最古のアマチュア劇団と言ってもいい、劇団からっかぜ。全国的にもその名は有名であり、観劇できることを楽しみにしていた。

戯曲『切り子たちの秋』は、1970 年代前半の東京の下町の小さな町工場の閉鎖をめぐる物語である。亡くなった父の跡を継いだ長女が、オイルショックを背景とする不景気の中で、町工場を閉めるかどうか思い悩む様子が描かれる。下町の工場の休憩室を表す舞台美術はとてもしアリスティックで、からっかぜが築き上げた舞台制作技術の伝統を感じられた。

本作に描かれている問題は、現代の日本がまさに直面している問題である。テクノロジーの進歩、若い世代と高齢世代の価値観の相違、その中で仕事の仕方、そして仕事を支える「家族」という概念の変容。本舞台は最後、従業員の一部が採算の取れない工場の後継ぎに名乗り出て、時代に取り残されているようにも見える「手仕事」にもまだできることはあると宣言して幕を閉じるが、それは現代を生きる我々にとって、とても重い問いかけだと感じた。

③ Fox Works 第 17 回講演『Magician's Worth』（作・演出・構成：狐野トシノリ、浜松市勤労会館 U ホール）

伝説のマジシャンを追い求める主人公が、マジシャンが集まるファンタジー上の幻影城に迷い込むというような内容だったと思う。途中、観客を巻き込んだクイズや謎かけのようなものが始まり、アトラクションの要素も取り入れられていた。

マジック、マジシャンというテーマを通して、何か演劇も含む芸術全般の価値、というような事柄を語っていたのかな、と思う。最後、伝説のマジシャン芥岡が消え去る場面で赤瀬川が述べる、ドラマに登場していたマジシャンたちが全員芥岡の作り出した虚構の人物だったのではないか、という台詞や、マジシャンの死は肉体の消滅ではなく不滅の存在として名を残すことであるという芥岡の台詞は、演劇や俳優についての自己言及の言葉として捉えることが出来る。自分は、イタリアの劇作家ルイジ・ピランデルロの『作者を探す 6 人の登場人物』を思い浮かべた。演劇のあり方が今、根本的に変わって行こうとしているのか、そして本作は演劇の新しいあり方を創作そのものにおいて模索する試みなのか、などと感想を抱いた。

④ シニア劇団浪漫座第 18 回公演『翔んで浜松』（作・演出：松尾朋虎、なゆた浜北なゆ

たホール)

タイトルからも分かるように、某大ヒット映画へのオマージュ作品であり、浜松と静岡の高校を舞台に、それぞれの街の特色や静岡県の各地域の特色などが比べられる。浜松と静岡の特色を比べどちらがいいと思うか、観客に直接手をあげさせるなど、アトラクションの要素も取り入れられていた。

内容が内容ゆえ、浜松の人の自意識のようなものを存分に感じ取ることができた。県庁所在地である静岡への思い、自分達の方言、天竜区との合併について、お茶など名産品について、観光名所について。なかなか様々な気持ちが入り乱れながら生活しているのだなと感心した。

最後の、「静岡県は一つ！」という宣言が重い。これだけ作中で「様々な静岡」を示しながら、一つの静岡県を求める台詞で終わるのだ。今の浜松および静岡の人たちのアンビバレントな感情をよく表していると思う。

総評

今回ともかく感銘を受けたのは、浜松にはびっくりするくらい多くの劇団があるということである。この自主公演に参加した劇団以外にも両手では収まりきれないくらい存在するらしい。そして作品を見ながら、一つ一つの舞台のクオリティの高さにも驚いた。演技、舞台美術、舞台照明、全てとても力を入れて作り込まれていた。お隣の静岡に SPAC があるとはいえ、ここまで市民間での演劇が盛んな地域はなかなかないのではないかと思う。少なくとも、私が生まれ育った福岡県だとか、去年まで住んでいた東京西部の三鷹市では、これほど多くの市民が演劇に携わろうとはしないだろうし、ここまでの熱量を込めて作品づくりに打ち込むことはないだろう。

私はこの浜松での演劇文化の興隆は、かなり地の利による、ある意味必然的なものではないかと思う。浜松は数々の企業が本社を構える都会だが、湖、山地、川、そして海に囲まれ、ある意味他の都市と離れている。それゆえに映画やミュージカル、テーマパークその他のビッグ・エンターテインメントが入り込む余地が少なく、演劇という身近かつお手軽な娯楽が長年愛されてきたのだろう。市民が作り市民が見るといふ演劇を 70 年もの間継続してきた劇団からっかぜの歴史が、それを物語っているように思う。演劇という芸術・表現の本来的な大衆性、度量の深さを改めて思い知らされた次第である。

これからは、浜松のこの重厚な演劇文化を日本全国、あるいは世界に向けて発信して行って欲しいと個人的には思う。浜松にはアクトシティ浜松、鴨江アートセンターなど多くの上演可能な施設があるが、演劇を継続的に上演し続けている場所はない。浜松の演劇人達が一丸となり、これが浜松の演劇、そしてその劇場だといえるような場所を生み出して下さることを心から望む。